

博物館という場所

川上 靖

〒 680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館

E-mail: kawakamiy@pref.tottori.jp

Occasional thoughts about museum

Yasushi KAWAKAMI

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

はじめに - エッセイを書く理由 -

博物館とは、いったいどのような場所なのでしょう
か？ 人それぞれ博物館の利用目的はさまざまである
と思われまふ。とりわけ近年は、博物館に対する社会的
的需要が高まり、その需要の中身も多様化、高度化し、
それに対応して博物館に大きな改革の波が押しよせて
います。例えば、公立博物館の設置および運営に関する
基準も 30 年ぶりに改訂告知されました。

このような波の中、博物館自体にも、社会的な使命
(ミッション)を自ら規定し、その実現へ向け中・長期的
な目標を公表するなど、社会的需要に応えていこう
という取り組みが活発化してきています。

「博物館はどういう場所であるべきか」ということ
は、詰まるところ博物館は「どう定義づけられるか」
ということでもあります。博物館の定義は、国内では
博物館法の第 2 条で定められています。国際的には
ICOM(国際博物館会議、<http://www.museum.or.jp/icom-j/>)の定義があり、日本はもとより各国の博物館
協会の拠り所となっています。この ICOM の定義は、
社会変化に対応するため、最近では数年おきに見直さ
れています。しかしながら、どの定義も「収集」「保存」
「研究」「教育」「普及(伝達)」「展示」のキーワードから成
り立っていることに変わりはありません。

それでは何を改革し、何を見直さないといけないの
でしょうか？ それは「研究」の中身であり、「教育」「普
及」や「展示」のあり方ではないかと思ひます。イギリ
スの博物館協会の見直しでは、博物館は「(前略)人々
が知的興奮や学習、楽しみを得ることを可能にする
『研究』『教育』『展示』でなければならないということ
です。

しかし、その実現は至難であると思われまふ。なぜ

なら、博物館の定義を再考することは指針にはなっ
ても、それで知的興奮を生み出す「展示」ができるわけ
ではないからです。改革の現場は、学芸員をはじめ博物
館で働く職員の日々の心がけと活動の中にこそあるの
です。

北九州市立自然史・歴史博物館(いのちのたび博物
館)の小野勇一館長は『博物館研究 Vol. 40 No. 1,(日本
博物館協会, 2005 年)』の巻頭言の中で、次のように述
べています。

「私は日頃から“博物館の展示は、物も展示方法も、
学芸員の研究の滴り(したたり)である”と考えており、
そうも言ってきた。よい展示はよい研究からのみもた
らされるのである。よい研究とはその分野において国
内・国際的に評価され、かつ国際誌級の学術雑誌に公
表されるものをいう。」

知的興奮を生み出すための根幹部分のみごとくに言い
切っている文章だと思ひます。展示に限らず、博物館
のどんな活動でも「研究」からもたらされるものです。
よい博物館にするためには、学芸員は日々少しでもよ
い研究になるように心がけなければならないと痛感し
てしまいます。

よい研究とは、その専門分野において高く評価され
るものであることはもちろんです。加えて、私は、今
の社会変化の中であって、人々が知的興奮や楽しみを
得るためには、その研究成果の提示において、ただス
トレートに結果を伝えるのでなく、新たな視点や切り
口でのストーリーの組み立てが必要になってくるとき
もあると感じています。その視点や切り口とは何なの
か？ 私自身まだ整理できていませんが、それは何か
哲学的なものであるようにも思っているところです。
そこで、今日まで思い巡らせ、機会をみて文章にも綴っ

てきたことを2本のエッセイにまとめてみることにしました。拙いエッセイではありますが、知的興奮や楽しさを生み出す博物館へ向かう「何か」が見えてくれば望外の喜びであります。

ホンモノとニセモノ

収集・保存にはじまり、調査研究、そして教育普及・展示まで、いろいろある博物館の活動の中で、最も多くの方に利用されているものは「展示」ではないかと思えます。そこで、博物館でモノをみるということについて考えてみます。

他ではみることのできない貴重なモノ、なかでも「本物(ホンモノ)」がみられる。このことは博物館の最大の魅力でしょう。それでは、なぜ、ホンモノには魅力があるのでしょうか。逆説的な言い方になりますが、それは「ホンモノはニセモノ」であるからだと思います。博物館にある資料の多くはホンモノです。例えば、鳥取県立博物館には全長7mになる巨大なダイオウイカの標本が展示されています。弥生人の脳が残っていたことでも知られる「青谷上寺地遺跡」から出土した木製品もあります。昆虫標本から鳥の剥製まで、どれをとっても正真正銘のホンモノです。しかし、これらには多くの情報が抜け落ちています。一例をあげると、ホンモノの鳥は生きており、飛んで、さえずります。一方、剥製には動き、鳴き声などの情報はありません。当館には、生きたオオサンショウウオを水槽で飼育展示していますが、生きているからといっても、展示ではその生態は分かりません。つまり、本来の生息地においてこそホンモノなのです。

博物館のモノは、すべての情報を含んでいないという意味においてはニセモノなのです。そこからは大事な何かが決定的に失われています。しかし、この失われた情報にこそ神秘があり、みるものの想像力をかき立てる魅力があるのではないのでしょうか。弥生時代の木製品をみて、当時の人々はこれを使ってどんな暮らしをしていたのか想像する。恐竜の化石から、その姿や動きを想像する。これぞロマンです。

ヤマセミという鳥の剥製(写真1)をみると、頭に見事な冠があります。これをどのように動かして、また何のために使っているのでしょうか。得られる情報を駆使して、最も矛盾のない説明を想像してみます。これを科学では「仮説」といいます。そして、これを証明するために観察・実験方法を考え、実際にやってみます。ここまでくるともう科学者と呼んでもいいくらいです。博物館でモノをみるとはこういうことだと思のです。

近年は、デジタルを駆使した楽しく分かりやすい展示機器も多くなりました。しかし、使い方に注意しないと、みる力、考える力が奪われてしまう気がします。博物館のモノをどうみせるのか! 博物館スタッフの力量・アイデアが問われているところでもあります。

最後に、巨大なダイオウイカを前にして、よく交わされる会話を紹介します。

「この大きなイカはどんな風に泳いでいるのですか? いったい何を食べているのですか?」

「今まで、ダイオウイカの泳いでいる姿を見た人は、この地球上に誰もいないのです。2本の腕はとても長いですね。みなさんは、どんな生活をしていると想像されますか?」

モノを前にして、みる側の感性とみせる側の感性がぶつかり合う、博物館はそんな空間ではないかと思うのです。



写真1. ヤマセミ(フッコウソウ目カワセミ科)の剥製

変わるものと変わらないもの

毎年毎年、変わることなく、冬は過ぎ春になり夏が来て秋が訪れと、季節は変わります。同じ場所でも、季節ごとに風景は違って見え、それぞれに趣があるものです。

ところで、毎年、見慣れたはずの風景がどこか違って見えるという経験はありませんか。例えば、水鳥の浮かぶ池の風景が昨年までと違って見えるとか。それは風景が変わったのでしょうか。そんなことはないはずで、変わったのは自分自身の方です。大げさな言い方をすると、自分の人生観・自然観が変わったということでしょう。昔、読んだ本を読み返してみたら、全く違うことが感じられたということも同じです。本に書かれている文字は何も変わっていないのですから。

博物館には、貴重な資料が変わることなく展示され

ています。もちろん、展示替えは行いますが、資料そのものは変化しません。博物館は、資料が腐ったり変わったりしないように保存する施設でもあるのですから当然といえば当然です。しかし、先ほど紹介した池の風景と同じように、全く違って見えることもあるはず。それは、昔とは違う(成長した?)自分が誕生したということではないでしょうか。考え方や見方が「豊か」になるということの真の意味はこのあたりにあるように思います。毎日の暮らしを例に考えてみると、私もそうですが、他人を見て「あの人は変わった、嫌いになった、好きになった」などと感じます。しかし、実はその人が変わったのではなく、変わったのは自分の方なのかもしれません。

話を博物館に戻してみると、見る側が変われば、見えるものは違って見えるということです。見る側だけで博物館の資料から得られることは無限にあるのです。「アッ」と驚くようなことが見えたら、今まで誰も気づかなかったことが感じられたら、それは博物館の資料の威力が増したのではなく、その人自身の観察力

や感受性に変化があったということではないでしょうか。

鳥取県立博物館は、自然・人文・美術の総合博物館です。私は自然の学芸員ですが、この中で仕事しているわけですから、何度も同じ絵画や彫刻なども見るようになります。すると、ある日、その作品から感じられる感覚が今までとは違ってあるときがあります。そして、妙にその絵画が心から離れなくなり、いろいろな思いを巡らせてみると、自分の考えや行動が昔とは変わっていることに気づきます。

「あの展示は一度見たからもういいや。」というのではなく、自分が変わったのかどうかの確認のためといっでは変かかもしれませんが、同じ作品や資料を再度見てみることに大きな意味はあるように思います。そのためには、博物館は多くの収蔵資料が未来の世代まで変化しないように、保存していかないとはいけません。時には修復も必要でしょう。これも博物館の大切な役割です。